

福岡市埋蔵文化財調査報告書第160集

No Ta Me Uti Watashi I Seki  
野多目拈渡遺跡 III

—野多目中央公園付設道路拡幅に伴う発掘調査報告書—



1987

福岡市教育委員会

## 序

本書は、福岡市南区土木農林課が南区野多目地内に計画した道路整備事業に先立って事前調査した野多目古墳遺跡第3次調査の発掘調査報告書であります。

3次目を数える今調査では、縄文時代晩期の貯蔵穴群を検出し、1・2次調査の成果と併せて、稲作文化を周辺にひかえた縄文時代人の日々のくらしを考えるとき、貴重な資料となるものです。

本書に収録された資料が広く市民の皆さまに広く活用されるとともに、学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

また、発掘調査及び資料整理にあたってご指導、ご協力いただきました多くの方々に対し心から感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

### —れいげん—

- 本書は福岡市南区土木農林課が計画した道路整備工事に伴い、1985年3月に実施した野多目古墳遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
- 本書に使用した方位は磁北方位で、真北より6°21'西偏する。
- 本書に使用した実測図の作成及び製図は小林の他に、山村・池田・和氣・三塙が行なった。
- 本書に使用した写真は小林が撮影した。
- 本書の報道は小林のほか山村哲栄・岩本陽児が行ない、文末に記した。
- 本書の編集には小林・山村が協力してこれにあたった。

道路調査番号	8446	遺跡略号	NTM
調査地地籍	福岡市南区野多目地内	分布地図番号	040(A-2)
開発面積	1,000m <sup>2</sup>	調査対象面積	350m <sup>2</sup>
調査期	昭和60年3月9日～昭和60年3月31日	調査実施面積	200m <sup>2</sup>

# 本文目次

## 序

I	はじめに	1
1.	発掘調査にいたるまで	1
2.	発掘調査の組織	1
3.	立地と歴史的環境	3
II	調査の記録	4
1.	調査の概要	4
2.	調査区の遺構と遺物	7
(1)	貯蔵穴	7
(2)	溝状遺構	11
(3)	河川	12
(4)	包含層出土の遺物	14
III	おわりに	16
1.	貯蔵穴群について	16
2.	貯蔵穴出土の種子について	18

## 挿図目次

1.	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
2.	道路網沿線図 (1/10,000)	3
3.	周辺地形位置図 (1/1,200)	5
4.	調査区全体図 (1/160)	5
5.	調査区南壁土壌図 (1/60)	6
6.	貯蔵穴群全景	7
7.	1号貯蔵穴全景	7
8.	1号貯蔵穴実測図 (1/40)	7
9.	2号貯蔵穴全景	8
10.	2号貯蔵穴実測図 (1/40)	8
11.	3号貯蔵穴全景	9
12.	3号貯蔵穴実測図 (1/40)	9
13.	4号貯蔵穴全景	9
14.	4号貯蔵穴実測図 (1/40)	9
15.	貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3)	10
16.	貯蔵穴出土遺物	10
17.	SD-01金景	11
18.	溝・河川位置図	11
19.	溝・河川出土遺物実測図 (1/3)	13
20.	溝・河川出土遺物	13
21.	包含層他の出土遺物実測図 (1/3)	15
22.	包含層他の出土遺物	15
23.	穀斗の遺存するイチイガシ	18
24.	ドングリ種子の高さ・最大径値の分布	19
25.	イチイガシ	21
26.	エゴノキ	22
27.	クス、Coix sp.	22
28.	チャンチンモドキ	22

# I はじめに

## 1. 発掘調査にいたるまで

昨今の福岡市の発展はめざましく市街地化の拡大とともに文化・教育施設の充実が急がれており、野多目地区住民の長年の熱望にこたえて、昭和57年に野多目中央公園が建設された。この公園用地は野多目C遺跡群内にあり、試掘調査の結果、縄文時代から古代・中世に亘って繰々と営まれた集落址であることが判明し、昭和55～56年に2次に亘る発掘調査が実施され、多大の成果を挙げている。

昭和58年、福岡市南区土木農林課では、この野多目中央公園整備事業の一環として公園にいたる南側道路の拡幅整備事業を計画し、当該地の埋蔵文化財の有無にかかる事前調査についての依頼が教育委員会文化課にあった。これを受けた文化課では、野多目中央公園での調査成果をふまえ、遺跡の内容、拡がりをより明確にするために道路に添って7本のトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、当該地の西側では表土下40cmで黄褐色粘土層になり、縄文土器を伴う土壌・溝・ピット等を検出した。一方、東側では表土下80cmで奈良時代の土器を伴出する東西に流れる河川を検出した。この河川は公園用地の調査で検出した河川（River 1）につながるものと考えられるが、狭小な調査面積や遺構の深さ等を勘案した結果、この区域の調査を断念し、西側の350m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することになった。この試掘結果をもとに南区土木農林課と協議を重ねた文化課では昭和58年度内に発掘調査すべく準備体制を調えたが、調査区域は水田に通ずる幹線農道にあたるために田植えを目前に控えての調査には地元の同意が得られず、収穫後に発掘調査を実施することで合意した。その後、準備作業は継続されていたが、調査担当班が東区の唐原遺跡の発掘調査にあたったために結果として昭和60年3月に発掘調査を実施した。発掘調査は昭和60年3月9日より開始し、縄文時代晩期の貯蔵穴群等を検出して3月31日の埋戻し作業をもって無事すべての工程を終了した。（小林）

## 2. 発掘調査の組織

調査委託 福岡市南区土木農林課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美（前任） 佐藤善郎（現任）

調査統括 文化課長 生田征生（前任） 柳田純孝（現埋蔵文化財課長）

調査庶務 埋蔵文化財第1係 折尾 学（係長） 岡崎洋一 岸田 隆

調査担当 埋蔵文化財第1係 小林義彦 山崎龍雄（試掘調査）

なお、整理にあたっては、多くの作業員の方々の他、山村信栄（慶應大学）、岩本陽児、池田祐司（九州大学）、和氣いづみ（別府大学）、三塙美由紀（西南学院大学）の学生諸君の協力を得た。また、柳田純孝・山崎龍雄・山口謙治氏には適切かつ貴重な指導・助言を受けた。（小林）



### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多湾にむかって開けた福岡平野のはば中央を御笠川・那珂川の二つの流れが寄り添うように北流して流域に幾多の河岸段丘をつくる。野多目古墳群は背振山の懷深くに源を発した那珂川の中流域左岸に拡がる標高15mの河川段丘上に位置し、福岡市文化財分布地図（中部・南部）により野多目C遺跡群として周知されている。

本遺跡周辺の歴史を概観すると旧石器時代にはじまる。南区柏原遺跡のほか、北接する野多目古墳群第1次調査で尖頭器・台形石器の包含層が確認され、野多目前田遺跡や那珂川右岸の日佐遺跡ではナイフ形石器が採集されている。

縄文時代になると遺跡は徐々に拡がりをみせる。油山の裾部にあたる柏原遺跡では早・晩期の集落址が調査され、那珂川右岸には那珂川町深原遺跡・春日市門田遺跡・柏原遺跡等がある。

一方、本遺跡に北接する野多目古墳群では後期の貯蔵穴群が、野多目A遺跡では晩期末の水田址が調査され、河川段丘（微高地）上に占地する集落址の様相が解明されつつある。

弥生時代には福岡平野のいたるところに大遺跡が分布する。殊に那珂川の右岸に連なる須玖から那珂・比恵の丘陵上には門田・須玖岡本・日佐原・那珂・比恵遺跡等の大遺跡群が占地し、古代「奴国」の中心を構成している。これに比べ、那珂川左岸域のこの期の遺跡は少なく、南大橋遺跡・和田遺跡等の甕棺墓地が知られているにすぎない。

古墳時代以降になると生産活動が活発になり、堅穴系横口式石室をもつ老司古墳や卯内尺古墳の他、上流域に多くの前方後円墳が展開し、集落址も急速に増加する。また、6世紀代の筑紫官家址と考えられる礎石群が三宅にあり、これや三宅庵寺等に瓦を供したと思われる瓦窯跡が三宅や老司で確認されている。中世以降には水田化がすすみ、今日に至っている。（小林）



2. 遺跡・周辺図 (1/10,000)

## II 調査の記録

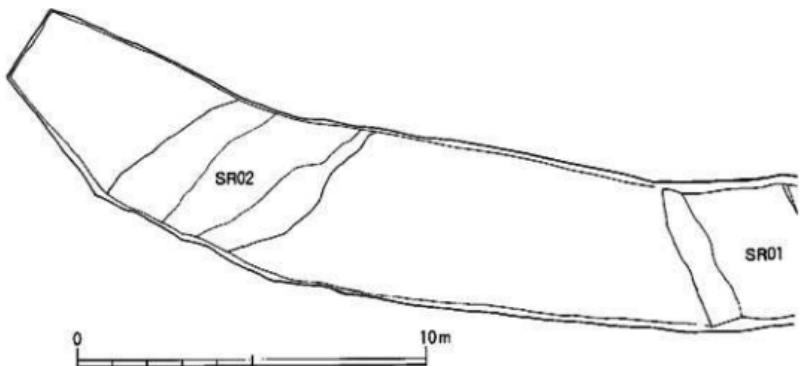
### 1. 調査の概要

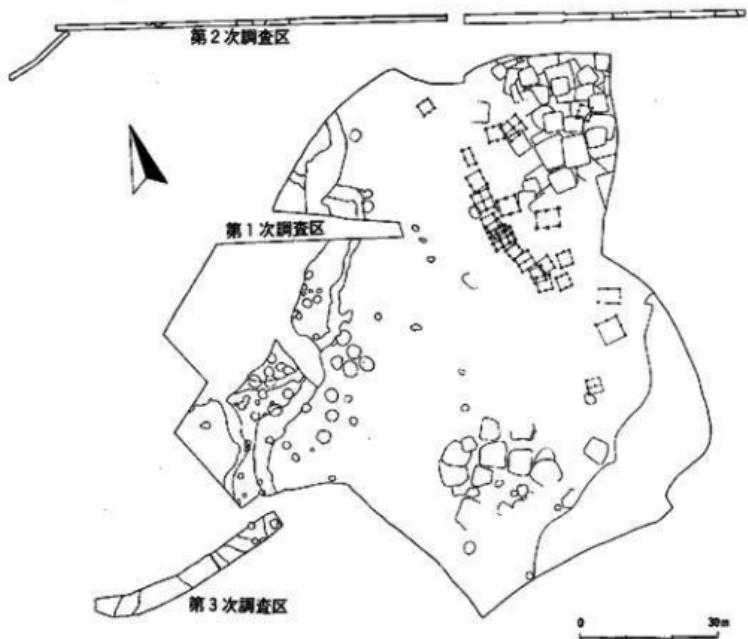
野多目古渡遺跡は、福岡市文化財分布地図「中部・南部」の野多口C遺跡群にあたり、野多目中央公園建設に伴う発掘調査で字名を遺跡名としている。この公園建設に伴う調査を第1次下水道建設に伴う調査（昭和59年11月）を第2次調査とし、本調査は第3次調査にあたる。

本調査は、幅2mの農道を5mに拡幅整備するに伴うもので、事業の性格上狭長な調査区の設定にならざるをえず、遺跡の全容を理解する上で必ずしも充分な成果を挙げえたとは云い難いが、1・2次調査の成果を考え合わせたとき、縄文時代後晩期の集落址解明の一助となるものであろう。調査にあたっては、調査区の長軸線上に任意にセンター杭を設定し、長軸線に2mのグリットを設定した。グリットは南から北へA・B・C、東から西へ0・1・2と付した。

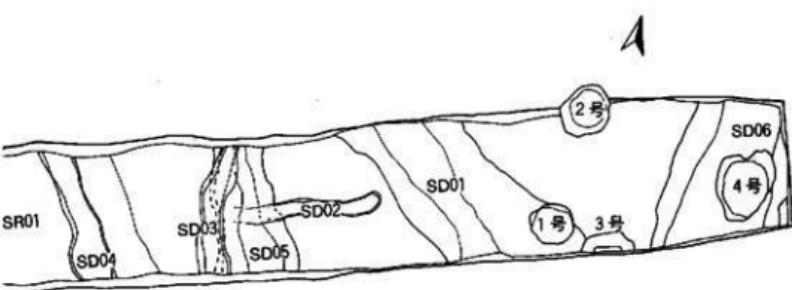
調査区の基本層序は、まず厚さ30cmの道路盛土があり、その直下に厚さ20~25cmの水田耕作土があり、更に5~10cmの厚さで床土が続く。床上下は部分的に5~10cmの暗褐色土層（包含層）あるいは砂層が堆積し、表上下60cm程で鳥栖ローム層（地山）に至り、一部の遺構を除いて、この面に穿たれている。検出した主な遺構は、貯蔵穴4基、溝6条、河川2条とピットであるが、ピットとSD-02-04の3条の溝を除く遺構はいずれも縄文時代晩期に属するものである。このうち河川は調査区中央部と西隅に在り、いずれも北へむかって流れる。第1次調査で確認されているRiver 2につながるか流れ込むものと思われる。貯蔵穴群は調査区の東隅に近接して在り、SR-01より8~10mの距離の台地縁辺にあたり、第1次調査地点と同様相を呈す。いずれも貯蔵穴底面より覆土に混入したイチガシが検出されており、この期の食生を窺い知る資料となろう。溝はいずれもSR-01以東に在り、概ね南北方向に流れる。このように本調査区ではSR-01を境として東側に遺構は集中し、西側には拡がらない。

以下、各遺構について知見を述す。（小林）

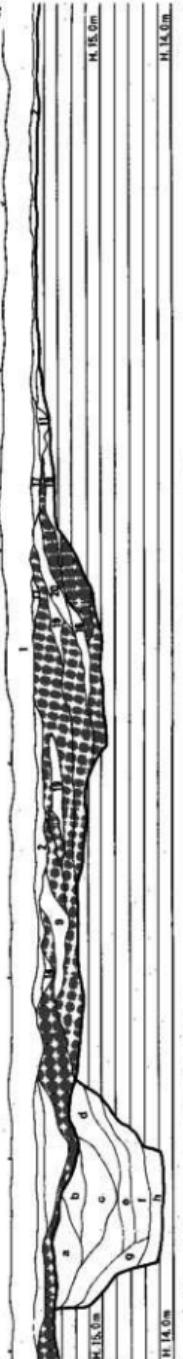




3. 周辺遺跡位置図 (1/1,200)

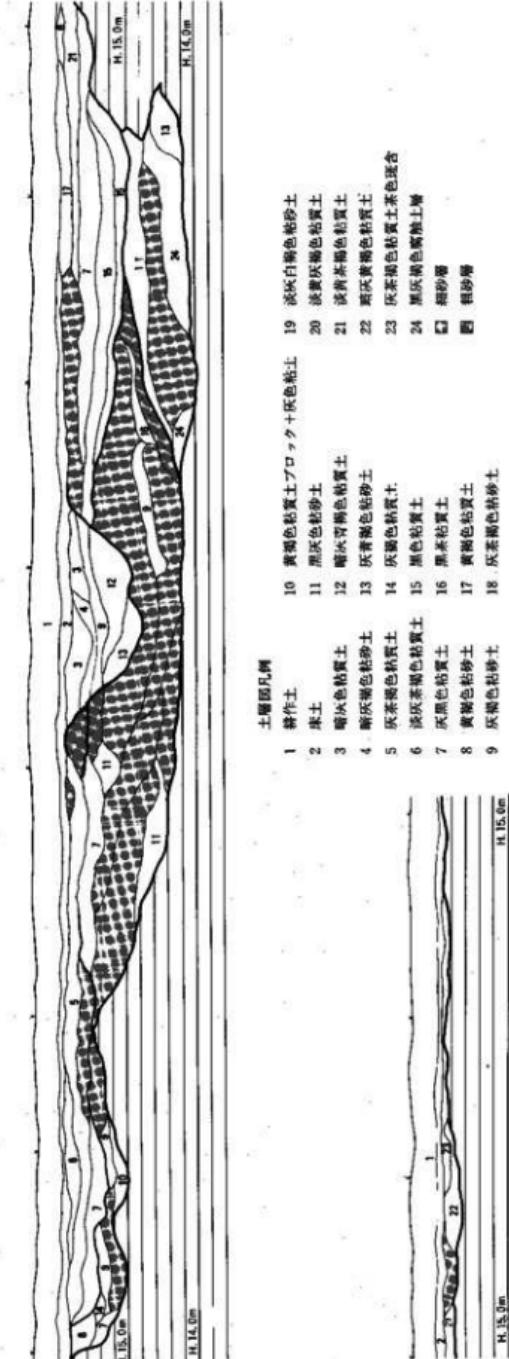


4. 調査区全体図 (1/160)



3号坑露头上部圆孔斜  
a 四季褐色粘质土  
b 黑色粘质土  
c 淡黄灰黑褐色粘质土  
d 淡褐色土

c 黑色强粘质土(硬ドングリ)  
f 黑色强粘质土(ドングリ合)  
k 黑色强粘质土(ドングリ合)  
h 黑色强粘质土(硬ドングリ)



土壤图例  
1 耕作土  
2 未土  
3 淡灰色粘质土  
4 新灰褐色粘质土  
5 淡灰褐色粘质土  
6 淡灰茶褐色粘质土  
7 淡黑色粘质土  
8 黄褐色粘质土  
9 淡褐色粘质土  
10 黄褐色粘质土+灰色粘土  
11 黑灰色粘质土  
12 淡灰青褐色粘质土  
13 淡青褐色粘质土  
14 灰褐色粘质土  
15 褐色粘质土  
16 黑茶褐色粘质土  
17 黄褐色粘质土  
18 淡茶褐色粘质土  
19 淡灰白褐色粘质土  
20 淡灰灰褐色粘质土  
21 淡灰茶褐色粘质土  
22 淡灰黄褐色粘质土  
23 淡茶褐色粘质土茶色混合  
24 黑灰褐色粘质土  
□ 相切带  
○ 针形带  
△ 钩形带

5. 调查区号体土壤图 (1/60)

## 2. 調査区の遺構と遺物

### (1) 貯蔵穴

調査区の東隅に近接して4基の竪穴遺構を検出した。調査区中央部を北流する自然流路S R -01に沿うように分布し、第1次調査区と同一様相を呈する。また、いずれの竪穴からも縄文時代晩期の土器少量とともにイチイガシを主とする種子が多量に出土し、殊に3号竪穴では底面に密着した状況で検出された。このことからこれらの竪穴群は、イチイガシを主体とした種子類の貯蔵を主目的として堀られた縄文後期から晩期の貯蔵穴群である。(小林)

#### 1号貯蔵穴

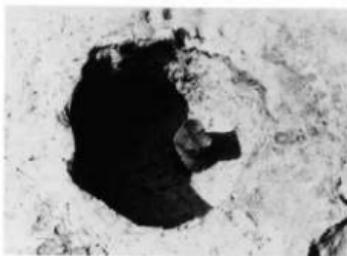
本遺構は、S R -01より9m程東に位置し、3号貯蔵穴の西に接して在る。平面形は径110cmの円形を呈し、深さは75cmを測り、八女粘土層まで掘られている。壁面はほぼ垂直に堀り込まれているが、西北側はわずかに袋状を呈する。覆土は黒色から灰黒色のシルト質粘土層でレンズ状の自然堆積である。覆土下層(検出面より40cm)からイチイガシの種子が多く出土し、底面には密着した状況で検出されたが、遺物は少ない。(小林)

この一号貯蔵穴の使用時期については出土資料が非常に少ないので即断し難いが、縄文時代後期から晩期前葉までに比定しうるものであろう。

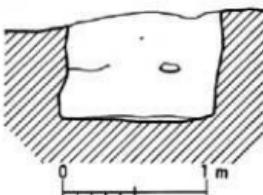
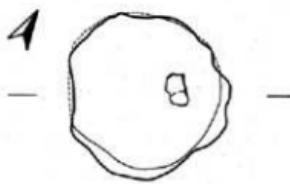
1は覆土中層より出土した粗製の深鉢で、口径12.3cm、遺存高12.3cmを測る。遺存状況は良好で、幅約1cmの粘土紐を巻き上げて成形し、その後に織維束状の工具を用いて調整している。外面は粗く搔き上げ、内面はナデで仕上げている。色調は暗灰褐色を呈す。この他には図示しえなかつたが、二枚貝の腹側でナデで仕上げた粗製の深鉢が小片で検出されている。(山村)



6. 貯蔵穴群全景



7. 1号貯蔵穴全景



8. 1号貯蔵穴実測図 (1/40)

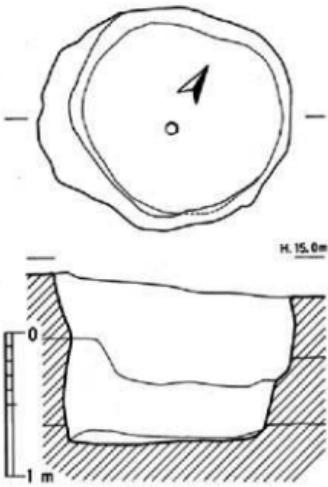
## 2号貯蔵穴

本遺構は、1号貯蔵穴の北2mの距離に在り、径140cmの円形プランを呈する。深さは105cmを測り、八女粘土層まで堀り込まれている。壁面は中位で崩落による弱い断を作り僅かに袋状をなす。底面の中央には径8cm程の凹み（柱穴痕？）が残る。また底面直上からはイチイガシを主とする多量の種子が検出された。種子の総量は2000個体にのぼる。出土遺物は非常に少なく、2の他には阿高系の土器片と滑石を含まない粗製鉢の小片があるにすぎず、俄に時期は決定しかねるが、中期末から晩期前半の幅で考えておきたい。（小林）

2は粗製の鉢形土器片を加工した所謂土製円盤の破片資料で、磨耗がみられる。元来は5cm程の大きさであったろう。胎土は粗く灰褐色を呈する。（山村）



9. 2号貯蔵穴全景



10. 2号貯蔵穴実測図 (1/40)

## 3号貯蔵穴

本遺構は1号貯蔵穴の東に接して在り、SD-01に切られている。南側半分が調査区外に在る為全容は把握できないが、現況で径145cmを測り、2号貯蔵穴と同規模となろう。深さは80cmを測り、八女粘土層まで堀り込んでいる。また、下層の黒色粘土層(12~15層)よりイチイガシが出土した。（小林）

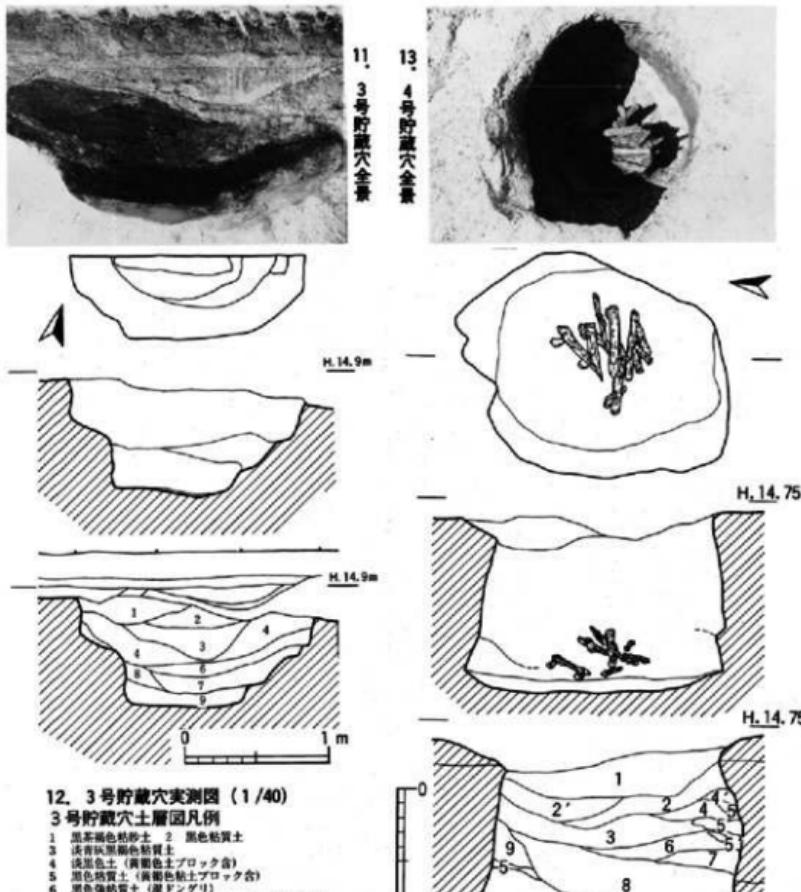
3は粗製深鉢の山形に突出する波状口縁部分の小片である。色調は黄灰褐色。この他に胴部の屈曲する粗製鉢の破片が1点出土している。（山村）

## 4号貯蔵穴

本遺構は調査区の東隅に在り、SD-06に切られている。平面形は長径180cm、短径150cmの梢円形を呈する大形の貯蔵穴で、遺存状態は良好である。深さは120cmを測り、壁面は袋状をなす。底面は浅い凹レンズ状をなす。また、底面直上には径5cm内外の半截木が敷きつめた状況で検出され、その直下から底面までの覆土中より多量のイチイガシを主体とする種子が出土した。1~3号貯蔵穴と同様に出土した遺物が少なく、その時期については即断しがたいが、出土した浅鉢の形態から縄文時代晩期中葉(突堤文土器以前)の遺構と云えよう。（小林）

4は胎土に滑石を含む阿高系の深鉢の口縁部片である。5・6は縄文晩期の粗製浅鉢で、胴屈曲部の

粘土紐接合部で欠損している。5の内面にはヨコ方向の研磨を加えている。駄土に差異があり別個体であろう。7は粗製の浅鉢になるものであろう。口縁端部を平坦に仕上げ、内外面にはともに強いヨコナデを加えて仕上げている。色調は暗灰褐色を呈する。8は口縁部が波状になる粗製の鉢形土器である。色調は黄灰色を呈す。(山村)



## 12. 3号贮藏穴实测图 (1 / 40)

### 3号贮藏穴土层圆比例

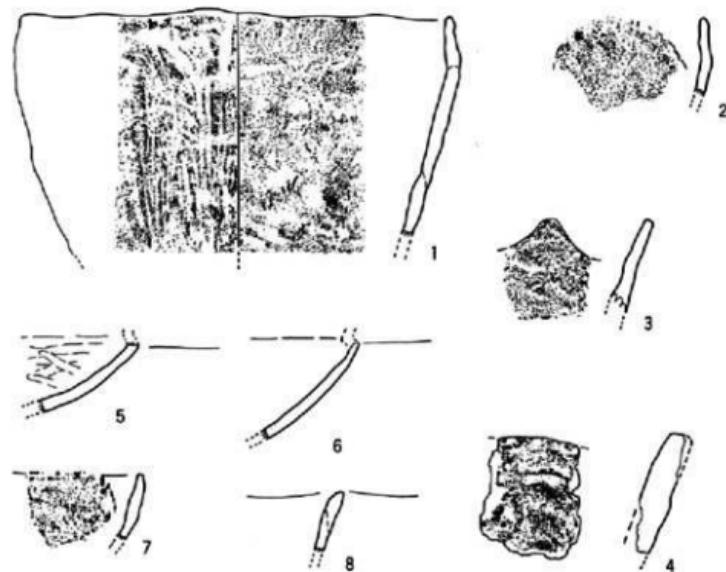
- 1 黒茶褐色粘土質 2 黒色粘土質  
 3 淡青灰黒褐色粘土質  
 4 深黒色土 (黄褐色土ブロック含)  
 5 黒色粘土質 (黄褐色粘土ブロック含)  
 6 黒色強粘土質 (濃ドングリ)  
 7 黒色強粘土質 (青褐色粘土ブロック・ドングリ含)  
 8 黑色強粘土質 (黄褐色粘土ブロック・ドングリ含)  
 9 黑色強粘土質 (濃ドングリ)

#### 14. 4号腔室空塞測図 (1/40)

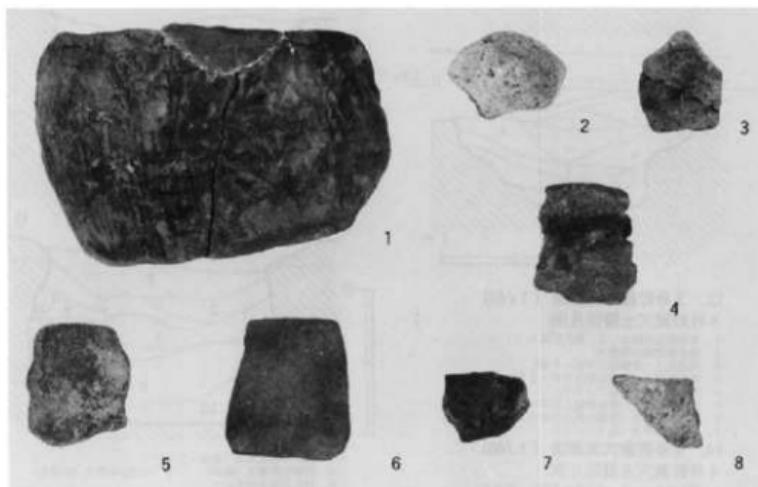
4. 等效財賦人獎勵圖

- 4 穴財藏人土層圓孔例

- 3 噴灰黑色粘質土(混砂・ドングリ)  
 4 混黑色粘質土(混砂) 4' 混黑色粘質土(砂多合)  
 5 噴灰褐色粘質砂土  
 6 黑灰褐色粘質土(混砂・ドングリ)  
 7 混灰褐色粘質土(混砂) 7' 黑色粘質土(ドングリ)  
 8 黑色粘質土(混砂) 8' 黑灰褐色粘質土



15. 贮藏穴出土遗物实测图 (1/3)



16. 贮藏穴出土遗物

## (2) 溝状遺構

調査区域内において6条(SD-01~06)の溝状遺構を検出したが、いずれもSR-01より東に在り、西側への遺構の延びりはない。これらの溝状遺構に伴う遺物は少なく、その明確な時期・性格等は十分に明らかにしえないが、すくなくともSD-02~04は中世以降のものと考えられる。また、SD-01・05・06は出土する遺物からいずれも縄文時代晚期中葉を下限にするものと考えられ、すぐ東に接して分布する貯蔵穴群との関係が想定される。(小林)

**SD-01** 調査区の東側をSD-05に約4mの距離を保って並流する溝で、北へ流れる。溝幅は約3mで、東岸は低い平坦面を作り、1・3号貯蔵穴と重複している。溝底は浅いU字状をなし、岸よりの深さは40cmを測る。また、西岸には流水・木葉の堆積がみられた。出土遺物の中には阿高式系の土器片も存するが、その主体は縄文晚期中葉の黒川式期に含まれ、1号貯蔵穴埋没後の早い時期に埋められたものとであろう。(小林)

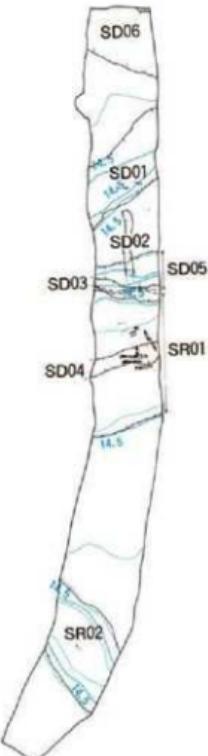
9・10は精製の黒色磨研土器である。9は復原胴部径13.8cmを測る小形の浅鉢である。遺存状況はあまり良くはないが、内面にはヨコ方向の研磨が施されている。器壁は薄い。10も小形の鉢型土器で、復原口径18.3cm、現存高5.7cmを測る。口縁部は屈曲部から折れ曲らず直線的に広がり、口縁が波状になる可能性が高い。調整は内外面ともにヨコ方向の研磨を施し、外側屈曲部に一線を引く。甘本市高原遺跡出土の精製浅鉢に類似を認め得よう。11は粗製の深鉢である。胴上部で一旦内側に括れ、小さく外反ぎみに聞いて口縁部に至る。器壁は薄い。調整は内面がヨコ方向のケズリ状のナデ仕上げ、外側は胴部がケズリ状の強いナデ、口縁部はヨコ方向のナデをベースに、右下から左上方向へ斜位の粗雑な条痕を装飾的に施す。また、一部に煤の付着が観察される。12は粘土に滑石を混入する深鉢の破片資料である。口縁端部には指頭による凹点文を施す。調整は指頭押圧後にナデ仕上げている。阿高式系の資料である。

(山村)

**SD-02** 本溝はSD-01の西にあり、SD-03に直交



17. SD-01全景



18. 溝・河川位置図

するようにはしる。溝幅40cm現長3.8m。断面型は逆台形で深さ10cmと浅い。遺物はないが中世以降の所産であろう。(小林)

**S D - 03** 調査区の中央部を S D - 04に並行する溝幅70cmの南北方向の溝である。断面形は浅いU字状を呈し、南側で小さな段をなす。覆土中より遺物は検出されなかった。(小林)

**S D - 04** S R - 01埋没後に掘られた南北方向の溝で S D - 03に 3 mの距離をおいて並走する。溝幅は85cm、深さは20cm、断面形はU字状を呈す。中世以降のものであろう。(小林)

**S D - 05** S R - 01の東岸にある深さ30~40cm、幅2.2mの溝である。S R - 01の先後は明瞭でなく、河岸の一部であった可能性もある。溝底面はU字状を呈し、両側は浅く二筋に流れを分つ。出土遺物からして S D - 01と同時期に比定しえよう。(小林)

14は粗製深鉢の底部で、底径13.8cmを測る。胎土は粗く砂粒を多く含む。色調は淡黄灰色。内外面に指頭押圧痕が残る。15は精製の浅鉢である。胴部は一且小さく内傾し、更に屈曲して外反する口縁部へとつづく。調整は内外面ともにヨコ研磨を施している。16は復原口径22.2cmを測る粗製の深鉢である。胴部は直線的に立ち上がる。口縁部は外方に小さく摘み出し、上端を平坦に仕上げている。25は斧部が尖る薄手の磨製石斧で、左右は非対象形である。刃部を欠くが、刃先欠損後も二次的に使用している。変成岩系の綠泥片岩製。重さは265g。(山村)

**S D - 06** 調査区の東端に位置する南北方向の溝で、4号貯蔵穴よりも新しい。溝幅は3.4mを測り、南側の調査区外で S D - 01と直交する。遺物は粗製深鉢の胴部片が主で、時期は断定しがたいが晩期の粗製深鉢の底部片が出土しており、下限を求めえよう。(小林)

17は粗製深鉢の口縁片である。胎土に砂粒を多く含み、茶褐色。(山村)

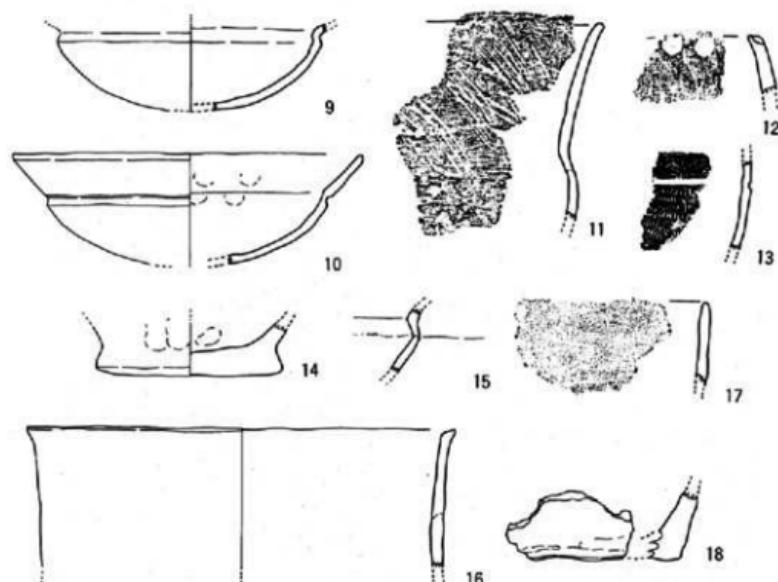
### (3) 河川

調査区の中央部と西隅部で北流する2条の河川を検出した。方向からすれば調査区の北方7~8mで合流することになるが時期が特定でないために定かにしえなかった。

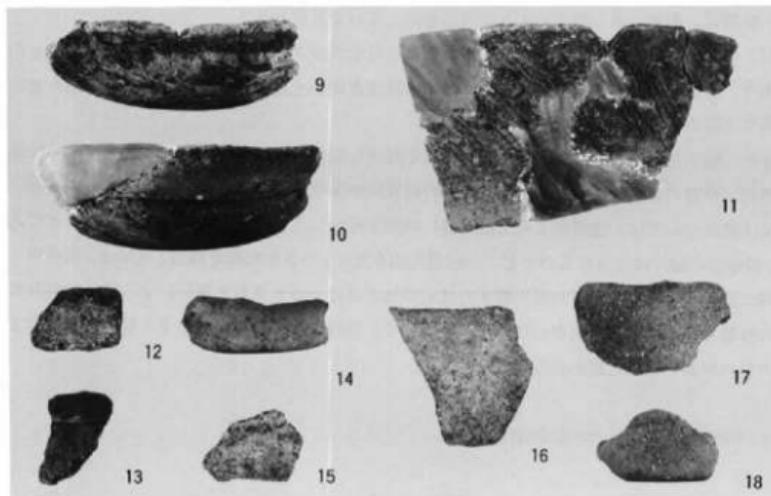
**S R - 01** 調査区の中央部を西に小さく膨らみながら北流する自然流路で、幅8m、深さは70cmと浅い。東岸は幅1m程の平坦面を作り、西側は緩くカーブするために駆面がオーバーハングしている。遺物が少なく時期は決し難いが、晩期中葉を下限とするものであろう。(小林)

13は深鉢の胴部片で、1条の沈線が巡り、その下部に擬似縄文を配しているが、施文原体は明らかでない。内面に指頭押圧痕が残る。縄文後期の所産であろう。18は深鉢の底部であるが磨滅が著しい。他に18に似た底部片や円盤状の加工土器片、黒曜石片が少量出土している。(山村)

**S R - 02** 調査区の西隅に位置する幅4mの自然流路で、北へ流れる。深さは80cmで、河岸は緩やかに傾斜する。調査区外北方で S R - 01と合流すると予想されるが出土遺物がほとんどなく、同時に流れていたか否かは明確に判じ難い。(小林)



19. 清・河川出土遺物実測図 (1/3)



20. 清・河川出土遺物

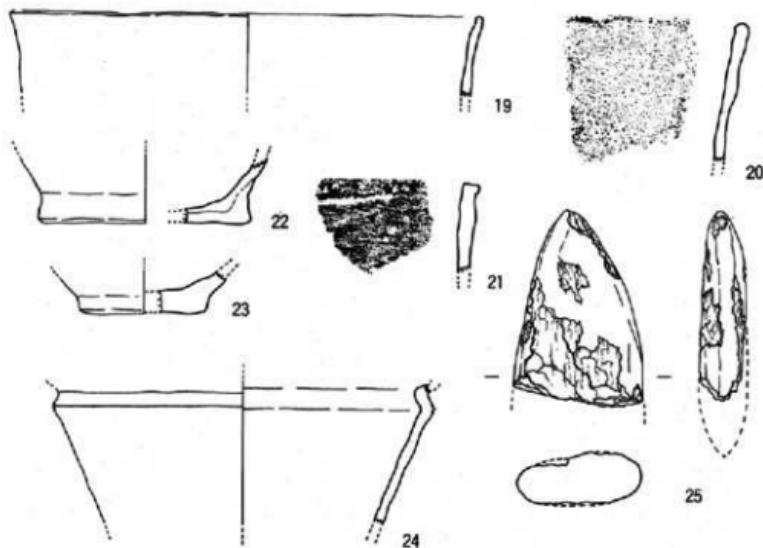
#### (4) 包含層出土の遺物

調査区の中央部を北流する S R-01 以東に暗褐色土の薄い遺物包含層が確認された。この包含層は厚さ 5~10cm で、中世以降の水田開発による削平が著しく、遺存状況は良くない。遺物は縄文土器を主体とするものであるが、小片かつ少量であるため明確な時期判別のできるものは少ない、概ね貯蔵穴群と相接する時期を考えることができる。

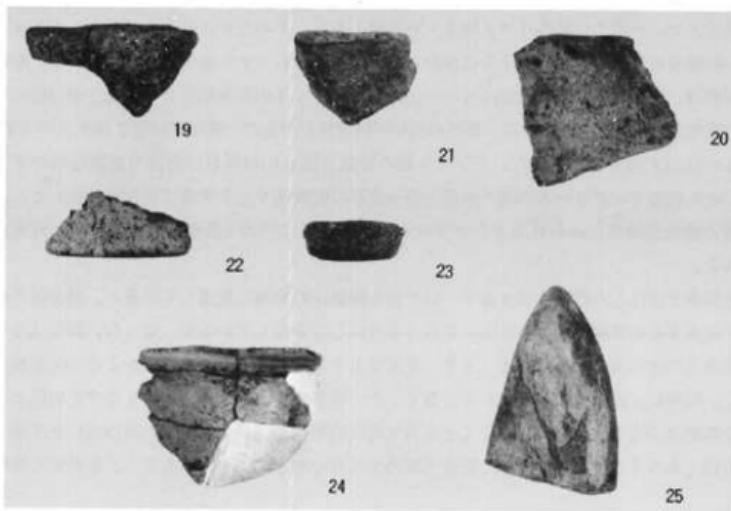
19・20・21 は粗製深鉢の口縁部である。19 は脇部はストレートに立ち上がり、わずかに外方に聞く口縁部につづいている。復原口径は 24.6cm、現存する器高は 4.2cm を測る。色調は浅黒い暗灰褐色を呈す。20 は口縁端部が最も厚みを持つタイプのもので、上端部を平坦に仕上げている。体部も厚手でありやや大形のものであったと思われる。現存高 7.0cm を測る。色調は淡黄灰色。21 は口縁部の破片資料である。口縁上端を平坦に仕上げ、調整時にはみ出した粘土塊をナデて一部突帯状にしている。小片資料であるため傾きについては多少の疑問が残る。22・23 は粗製深鉢の底部破片である。23 は体部から底部にかけて「く」字形に屈曲しており、接地部分が突出している。復原底径 11.1cm、現存高 3.4cm を測る。色調は外面が黄灰色、内面が黒灰色を呈する。23 もやはり体部から底部にかけて弱い「く」字形をなす底部で、復原底径 6.8cm、現存高 2.2cm を測る。砂粒を含むが精製された胎土で、色調は外面が淡褐色、内面が黒灰色を呈する。24 は精製の浅鉢である。口縁端部が欠損しているため詳細は併じ難いが、内面端部にわずかに沈線が残っており、ここから上方に短くくびれていたものであろう。「く」字形に屈曲するくびれ部から下は緩やかに内に向うでなく下方にのびる。このタイプとしては深い部類に入る。遺存状況が悪く器面調整などは不明である。胎土は精製され、砂粒をあまり含まない。色調は、本来いぶし焼きにより漆黒色を呈していたと思われる。

以上示した 6 点のうち 23 は弥生土器に含まれる可能性があるが、他は縄文時代に属するものであり、特に 22 と 24 は晩期に属し、24 は甘木市高原遺跡出土遺物中に類例が見られ晩期中葉の突帯文土器出現以前のものである。

また、図示した遺物の他にも、縄文時代中期から晩期にかけての土器片多数、奈良時代須恵器片、中世の青磁片・すり鉢片、近現代の磁器片や黒曜石剝片数点などが出土しているが、縄文土器については、遺構出土の土器同様に時期が確定しない粗製の深鉢片がほとんどである。黒曜石の剝片は小さなものでどこかに自然面を残し、小さな転写を利用している。所謂中・後期に盛行する鉈桶タイプの剝片類またはその加工品は一点も見られない。よって、これら粗製の鉢類は鉈桶タイプが流布した時代より新しく、突帯文土器出現以前つまり晩期中葉に属する可能性が高いものと思われる。(山村)



21. 包含層他の出土遺物実測図 (1 / 3)



22. 包含層他の出土遺物

### III おわりに

今回の野多目括渡遺跡（第3次）の調査は、事業主体の制約から、幅4m、長さ53mの狭長なトレンチ様のきわめて限られた範囲の調査となり、遺跡の全体像・性格等を十分に把握することができなかった。検出した遺構は、貯蔵穴・溝状造構・河川（自然流路）のみで遺跡の縁辺にあたり、かつ、出土遺物も非常に少なく明確な時期は決し難いが、いずれも縄文晩期中葉（突帯文土器出現以前）を下限とする縄文時代後半期に属する生活（集落）遺構であろう。

しかし、幸いにも調査区の北東には縄文時代中期末から後期初頭の50基にのぼる貯蔵穴群・溝状造構・河川、縄文時代晩期末（夜臼式）から弥生時代初頭（板付I式）の溝を検出した第1次調査区が隣接して拡がり、その調査成果をふまえて不十分ながらもう一度整理しなおして若干の問題点を挙げ今後にそなえたいと思う。

#### 1. 貯蔵穴群について

元来、縄文時代における所謂「貯蔵穴」は、縄文時代前期以来全期に亘ってつづき、北は北海道から南は九州鹿児島に至るまで広く日本全国に分布している。しかし、時期的には縄文時代中期と晩期に集中する傾向があり、中でも中期は東日本に、晩期は西日本に多く分布するようである。しかも東日本ではクリ・クルミを中心としたものが、西日本ではドングリを中心としたものが多くなっている。これらの木の実（堅果類）の貯蔵・保存にあたっては、東日本に多いクリ・クルミ等の場合は、住居址内あるいは住居址近くに立地する貯蔵穴に乾燥して保存することが一般的であったといわれている。一方、ドングリ類の場合は、食用に供するためにタニン・サボニン等の「アク抜き」を必要とする。そのため湧水点が近く、地下水位の浅い谷部や河川沿いの水分が十分に保持あるいは透過されやすい場所に選地している。貯蔵穴の形態は、平面形は概して円形のものが主体であるが、その断面形により、深さが口径の半分程度の比較的浅い「皿状」のもの、深さの深い「円筒状」のもの、底径が口径より大きい「袋状」<sup>(註1)</sup>のものに三大別できる。また、ドングル類の貯蔵方法も山口県岩田遺跡<sup>(註2)</sup>や佐賀県坂の下遺跡<sup>(註3)</sup>例にみられるドングリ→木の葉→木組み蓋→標石の貯蔵法をとる所謂「塊状貯蔵法」と、岡山県南方前池遺跡<sup>(註4)</sup>例にみられるドングリ→木の葉と交互につめて貯蔵する所謂「交互貯蔵法」<sup>(註5)</sup>がある。

本調査で検出した貯蔵穴は4基で、いずれも調査区の東隅に近接して位置し、調査区の中央部を北流する自然流路（S R -01）に沿うようにして分布しているが、切り合い関係はない。各貯蔵穴の床面直上からは、イチイガシを主体とする所謂「ドングリ」がおよそ6000粒検出された。同時に、出土遺物がきわめて少なく、かつ粗製鉢形土器小片が主体をなすため俄かに明確な時期は決定しがたいが、少なくとも縄文時代晩期中葉（突帯文土器出現以前）を下限とするものであろう。また、近接した貯蔵穴間の切り合いがないことを考えると、さわめて短時間

(註1) 「岩田遺跡」1974、山口県平生町教育委員会

(註2) 「坂の下遺跡の研究」1975、佐賀県立博物館調査研究書2

(註3) 「小坂穴(2)」櫛越正行1976、史家6

のうちに形成され、廃棄されたものであろう。

貯蔵穴の形状は、ほぼ円形の平面プランで、第1号貯蔵穴が径110cmとやや小形であるほかは、径140~180cmを測るが、北接する第1次調査区の径200~300cmを測る大形の貯蔵穴と比べた場合かなり小さい。この規模の大小がその時期差によるものかどうかは判然としがたい。深さは1・3号貯蔵穴が75~80cmとやや浅めの「円筒状」、2・4号貯蔵穴が105~120cmとやや深めの「袋状」をなしている。また、底面はいずれも八女粘土層にまで達している。いま、この八女粘土層と鳥栖ローム層との境界近くには湧水点があり、調査中にもかなりの湧水が認められた。このことと低台地の縁辺を流れる自然流路の傍という立地を考え合せると、貯蔵穴内は水に浸されないまでも、常に十分な水気が保持されていたであろうことは想像に難くない。ドングリ等を水漬け状態にすることによって、含まれるサボニン・タンニン等の渋味を水溶除去(アク抜き)するという従説に従えばその機能は十分に果していただろうと思われる。

貯蔵の形態については、2・4号貯蔵穴が比較的良好な遺存を示している。2号貯蔵穴の底面には径5cm程の半裁木と木の葉があり、2000粒程のイチイガシが一部底面にくい込んだ状態で検出された。底面中央には径8cmの深い凹みがあり、半裁木を支柱とする屋根構造があった可能性が考えられる。4号貯蔵穴も底面に木の葉を多く含む黒色粘質土が10~15cm堆積しており、この中から2500粒余のイチイガシが検出された。更にその上には、径5~8cm、長さ30~50cmの半裁木・割り材があり、佐賀県坂の下遺跡等に例をみると、所謂「塊状貯蔵法」と呼ばれるものである。1・3号貯蔵穴のそれは明確ではないが、恐らくこの方法によっていたであろう。<sup>(註4)</sup>

本遺跡の貯蔵穴は構造的には必ずしも良好な資料ではないが、第1次調査区例と合わせ考えると、西日本で縄文時代後晩期に通有にみられる立地・構造をもったドングリ貯蔵穴で、春日市門田遺跡では弥生時代後期までその構造・機能は受け継がれている。これらの貯蔵穴がいずれも集落から離れた湿潤の条件を満たす場所に立地していることを考えれば、ある特定の目的と機能をもつたものであることは容易に理解しうる。しかし、これをもって「アク抜き」と即断するには幾分の疑問が生じる。つまり、水漬けによる「アク抜き論」自体が実験を伴ったものではなく、今ひとつ実証性に欠ける点である。水漬けはタンニンの除去には有用であるが、サボニンは非水溶性で、地下貯蔵による水の透過程度では効果はないといわれている。貯蔵穴内より検出された木の実は渋味をとることなく食用となりうるイチイガシがその大半を占めていることもそのひとつである。<sup>(註5)</sup>

一方、本調査区の貯蔵穴群は、縄文後期前半とされる第1・2次調査区と構造・立地条件は同じくするものの規模において異なる。また、縄文時代後期前半に営まれた貯蔵穴群は廃絶後晩期に至ってその南方に再び展開する。これが集落の完全なる廃絶に起因するものか、あるいは周辺に移動したものか即断しがたく、貯蔵穴の機能論と含めて今後の成果を待ちたい。

(註4) 「岡山県山陽町南方前池遺跡」 1969、私たちの考古学7

(註5) 註3に同じ

(註6) 「野呂古墳群」 1983、福岡市教育委員会

(註7) 山陽新幹線関係埋文化財調査報告書第11集、「門田遺跡古墳群の調査」 1979、福岡市教育委員会

## 2. 貯蔵穴出土の種子について

本稿ではこの遺跡から出土した植物遺存体（いざれも種子）数種について紹介し、特に食料として利用されたと考えられる「ドングリ」を中心として考察を加えるものである。

### 所謂ドングリについて

#### 同定 / 考察

#### その他の植物遺存体について

エゴノキ / クスノキ・ジュズダマ類 / チャンチンモドキ

### 所謂ドングリについて

今回の調査で4基の貯蔵穴、所謂ドングリピットから、完形・半碎の状態で計5,500余個のドングリが出土している。遺構ごとの数量を表に示す。

	完形品	半碎品	計
1号穴	415	117 ( 204%)	792
2号穴	1,682	320 ( 19%)	2,172
3号穴	... ( 完全なためカウントしていない)		
4号穴	3,552	366 ( 10%)	3,918
計	4,719	843 ( 16%)	5,562

### 同定

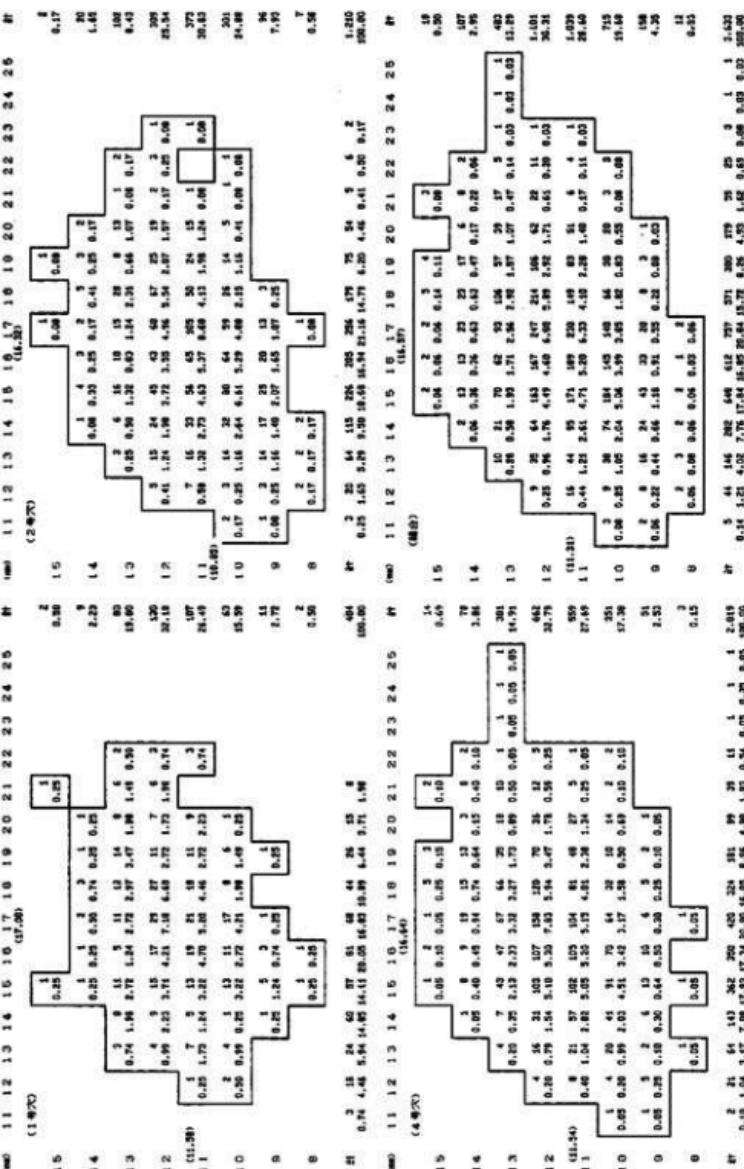
これらのドングリは遺存の状態は良好とはいえ、すべて黒褐色に変色しており、生時の色彩、模様をとどめてはいない。外皮だけのものが大半で子葉を遺存するものはまれである。完形品の観察により次の点が判明した。

標本のうちのいくつかは殻斗（おわん）がついた状態で出土している。その殻斗の同心円状の横紋からそれらが、コナラ属（Quercus）のうちアカガシ亜属（Cyclobalanopsis）に属するものであることがわかる。また標本の過半数には頂上部に柱頭由来の小突起が遺存しているが、その形状はアカガシ亜属に属するイチイガシの特徴と合致する。（写真23参照）

ただし標本の多くは小突起が欠損しており、同定に必要な情報を得ることができないため、ただちに本遺跡出土のドングリ全体がイチイガシであるということは出来ず、複数の種のドングリが混在している可能性も考えられる。その可能性を減らすために標本を群として考え、次の操作を行った。即ち、計測可能なドングリについて高さと最大径を測定し、前者の値をX軸、後者の値をY軸にとってその分布を調べた。なお重量については遺存の状態により誤差の大きい事を考えて採用しなかった。複数の種が混在しているのならそれは何らかの分布の違いとなって現われると思われる。貯蔵穴毎に分布とその実数、全体の中での割合を示したもののが分布図24である。上の数字がドングリの個数、下の数字が全体に占める割合（パーセント）である。



23. 殻斗の遺存するイチイガシ (1×1)



## 24. ドングリ種子の高さ 最大価値の分布

計測にはノギスを用い単位はミリメートル。小数点以下は四捨五入した。データの性質上サンプルの数が増すごとに分布のばらつきがなくなってゆくさまが読みとれる。しかし、分布に複数のピークのあることはこの図からは読みとれない。

以上の分析から本遺跡出土のドングリのすべてがイチイガシであると断定できないまでも、その可能性は高いと判断される。(写真25参照)

### 考察

イチイガシ (*Quercus ilex* Bl.) は、さきにも述べたとおり、アカガシ亜属に含まれる常緑カシ類の一品種である。

現在の植生についていえば、アカガシ亜属には他にアラカシ、ツクバネガシ、アカガシ、シラカシ、ウラジロカシが本原下に産することが知られている。後三種は上部常緑林（大まかな目安として標高4~500メートル以上）に見られるのに対し、本種は前二種とともに、より標高の低い常緑林内に産することから、アカガシ亜属の中でも比較的寒さに弱い種であると判断される。従って本種の出土は、当時の気候が今と同じでなかったとしたら現在よりもいくぶん温暖であった可能性を示すひとつの裏づけといえよう。

ところでイチイガシを食料資源として考える際に、シイ属 (*Castanopsis*)、マテバシイ属 (*Pasania*) の3種を除く他のドングリ類との、問題となる最大の相違は、本種がこれをそのまま食用としても苦味、渋味等の不快な感覚を味覚に及ぼさない、所謂生食可能なドングリであるという点にある。従って、「アク抜き」の技術にかんして云々することは、この資料からは不可能である。

さきに述べたとおり、この遺跡から出土したドングリはおそらく、すべてがイチイガシであると判断された。そこから次の二点が問題として浮かんでくる。

- ① 握貯藏されたドングリが「生食可能」なものであるということ。
- ② しかも、その性質をもった他の種（例えばシイ類、マテバシイ）を含まず、イチイガシのみ出土であること。

①からまず導かれるのは、アク抜き技術の有無はともかく、この遺跡をのこした人々が苦味や渋味を有するものとそうでないものとを味覚のうえで弁別する能力を備えており、しかも前者を排除していたということである。

ヒトも動物の一員である以上、かつては他の哺乳動物と同様、今日いう「生食」の可能不可能にかかわらず各種の木の実、草の実を生食してきたのであり、味覚を身につけ、嗜好を発達させてきた結果、今日に至っている。ということは、けだし当然といえよう。

しかしながら植物質食料にかんする従来の研究にはこの視点が欠落しており、十分に発達した味覚をもって食用、非食用を判断し、アク抜き技術の開発によってそれ迄は食用とならなかつたものが食用とされるようになったという如き、逆立ちした論が行われてきた。この状況は反

省される必要がある。

人類の味覚の発達をも文化の問題としてとらえ、それを歴史のスケール上に位置づけてゆくという作業が見直されるべきであろう。そのかぎりにおいてこの遺跡の如き「アグ抜き」を必要としないドングリの出土は、実は重要な意味をもつものと考えられる。

②は、シイ類やマテバシイとイチイガシが当時、同じような条件で分布していたとすれば、種による保存性の違い等の原因により、人の側に何らかの選択が行われていたとも考えられようが、そうであったとする根拠は今のところない。従って植物の側の分布に原因を求めるのが適当であろう。

今日見るかぎりではシイ類は常緑林に普通であり、マテバシイも常緑林、特に沿海部には多いところがイチイガシは県下各処に産するもののその自生は量的にみてきわめて少ない。この地域で見るかぎり本種の分布は特異であるといえる。

従ってこの点に関しては、花粉分析等の方法により当時のフローラを明らかにすることが先決であり、現在の樹相からの推論は困難であるといわざるを得ない。

### その他の植物遺存体について

#### エゴノキ

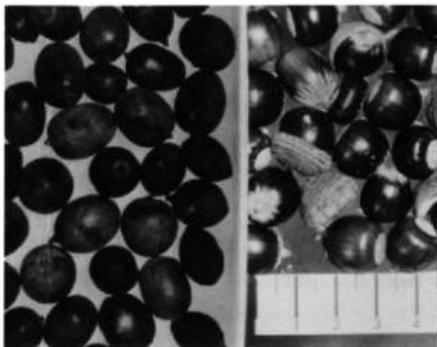
2号穴から6個出土した種子（写真26）は、大きいもので長さ11mm、径8mm、小さいもので長さ8mm、径5mm。保存は良好で堅い。表面をタテに走る三本の浅い溝のために三裂しているように見える特徴からエゴノキ (*Styrax japonica Sieb. et Zucc.*) と判断する。

この種子から油がしぶられるという点に着目して本種を食用であったとする見解もあるが、有毒植物でもあり、油として灯火用に利用したという民俗例があったとしても、出土のみをもって、さような利用が行われていたと考えることはできない。数量的にみても人が意識的に集めたというより自然の混入と考えた方が適当だろう。

本種は現在のこの地域にも普通に見られる。北海道からフィリピン北部まで広く分布することが知られており、古気候・古環境等の復原には役立ちそうにない。

#### クスノキ・ジュズダマ類

2号穴からクス (*Cinnamomum camphora Sieb.*) の種子が4粒出土している。偏円形で、大きいもので径6mm、小さいもので5mmである。ジュズダマ様の種子は1粒のみ出土。長さ10mm、



25. イチイガシ（左、出土イチイガシ 右、現生種×0.7）

巾8mm、厚さ6mm。ジェズダマかハトムギかの区別が困難であるため *Coix sp.* としておく。両種とも保存は良好である。(写真27)

クスノキの果肉は、他の部位と同様樟脳臭がつよく、食用になったとは考えがたい。もちろん食用にする目的で貯蔵したとも思われず、量の少なさから見ても混入によるものであろう。*Coix sp.* 頬も混入したものと解釈される。

#### チャンチンモドキ<sup>注①</sup>

4号穴から種子が2個出土している。大きい方の長さ17mm、径16mm。小さい方はそれぞれ16mm、14mmである。横断面はふくれた5角形に近い。上端の五つの発芽孔が特徴的である。チャンチンモドキ (*Choerospondias axillaris* Burtt et Hill) の内果皮である。(写真28) 本種は、遭難からの出土はわりに多く報告されているが、現在の分布はきわめて限られており、国内では南九州の照葉樹林下にわずかに自生することが知られているのみである。食用の可能性について、多汁質の中果皮が食用になるという考え方もあるが、ヤニ臭くて不適であるという考え方もある。いずれにせよ、貯蔵穴に納めることにメリットがあるとは思われず、数の少なさからみても混入の可能性が高い。(岩本)

26

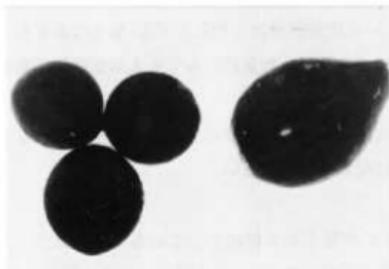
エゴノキ  
( $\times 1.5$ )



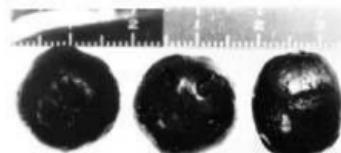
註① この分布図の作成にあたって、原農氏(福岡市南区屋形原在住)の御協力を得た。記して感謝申しあげます。

註② マテバシイの多くは江戸時代の植林によるものともいわれる。

註③ 本種の同定にあたって、九州大学農学部造林学教室助手、矢橋久先生ならびに大学院生岡野哲郎氏の御教示を得た。記して感謝申しあげます。



27. クス(左) *Coix sp.* (右) ( $\times 3$ )



28. チャンチンモドキ ( $\times 1$ )

---

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第160集

野多日拾渡遺跡 III

1987年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大名2丁目10の29

印刷 博巧印刷株式会社

---



イチイガシ